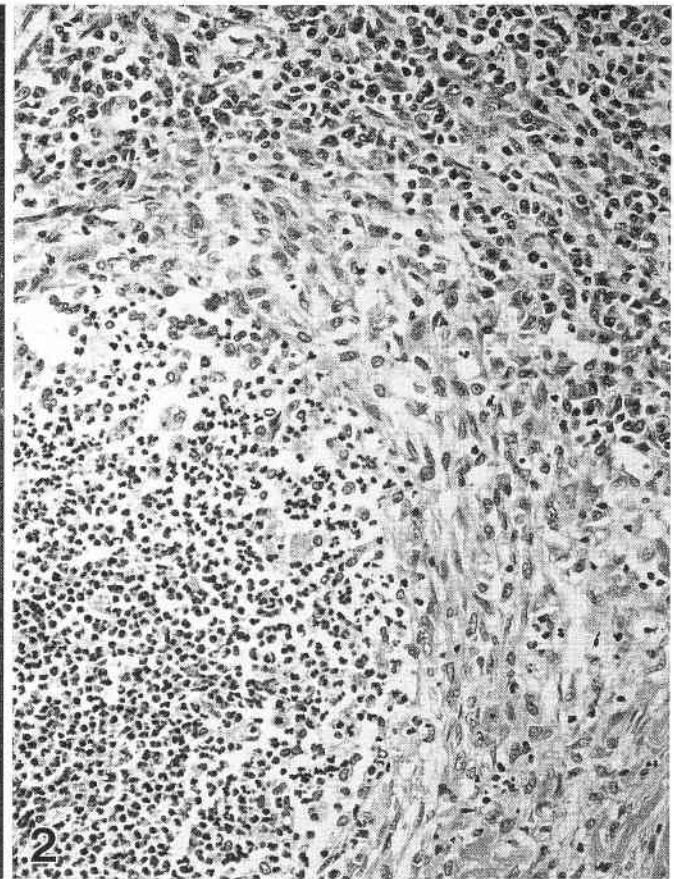
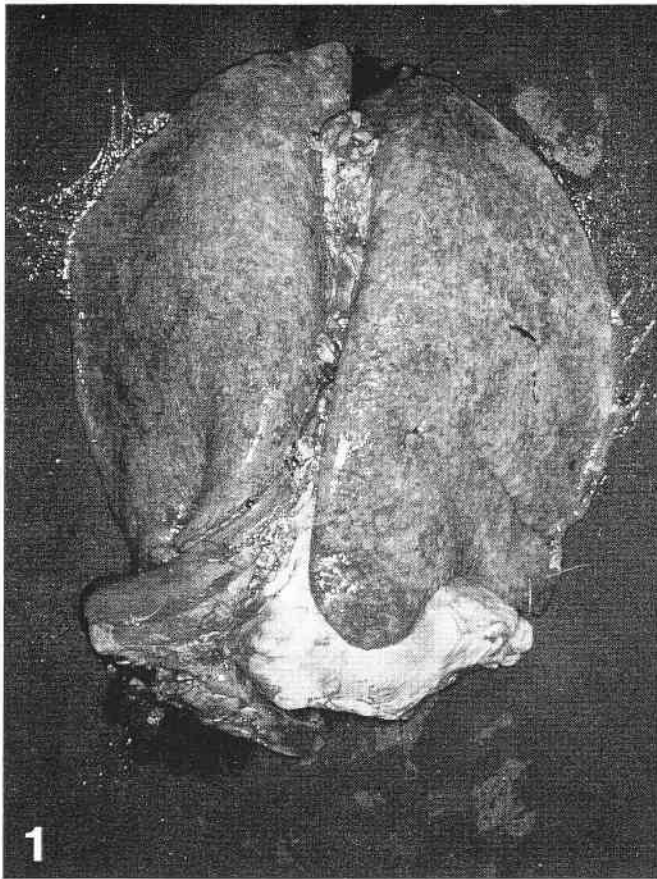


ヤギの肺

北里大学獣医畜産学部獣医病理学教室出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 788



動物：芝ヤギ，雄，2歳。

臨床事項：2000年4月17日，元氣消失と食欲廃絶で当大学家畜病院にて診療を受けた。可視粘膜は蒼白，肺音粗，泡沫性の流涎を認め加療したが，症状は好転せず20日に死亡，病理解剖に処された。血液検査では好中球増加（白血球数 $45,400/\mu\text{l}$ ，うち好中球 89%）が顕著であった。

細菌学的所見：肺炎病巣から，*Nocardia* spp. と *Bacillus thrugiensis*, *Bacillus brevis* が分離された。

肉眼所見：肺の全域に粟粒大から小指頭大の不整形白色調ないし化膿性の小結節が密発し，硬度を増していた（写真1）。肺付属のリンパ節は髓様に腫大していた。肩前リンパ節，腸骨下リンパ節，回盲部腸リンパ節に乾酪化膿瘍が形成されていた。

組織所見：粟粒状の結節はいずれも結合組織に被覆された化膿性病巣であり，結節内部には希に真菌の存在が確認された（写真2）。非結節部の肺組織，小気管支でも化膿性ないし線維素性の肺炎を生じており，時折真菌が存在していた。上記のリンパ節乾酪

化膿瘍ではノカルジアのロゼットが多数観察されたが，肺組織内では見出されなかった。

診断と考察：ノカルジアと真菌の共生的重複感染による肺炎がしばしば報告されていることから，その可能性があるのではなかろうか出題したが，最終的には「真菌性化膿性肉芽腫性肺炎」と診断された。また，形成された肺の結節を慢性膿瘍か肉芽腫とするかについては，肉芽腫でよいとされた。